

# 韓国の初等統合教科である「かしこい生活」に関する研究

— 成立過程とカリキュラム分析を中心に —

山田 頌

(愛知教育大学大学院 生活科教育領域)

A research on "wise life" which is a South Korean elementary integrated subject

— A formation process and curriculum analysis —

Sho YAMADA

(Graduate Student, Aichi University of Education)

## はじめに

本研究は韓国の初等統合教科の一つである「かしこい生活」という教科の概要をつかみ、日本の生活科的な視点から考察を加えることで、「かしこい生活」のカリキュラム的特質を明らかにすることを目的とする。

そのためにもまず、韓国の統合教科および「かしこい生活」の成立過程を社会的な背景を交えながら概説し、これらがどのような経緯で生まれ、発展していったのかを明らかにする。同時にそこにある理念についても触れる。

次に韓国の『교육과정』(教育課程)における「かしこい生活」の記述を、日本の生活科の視点から分析的に詳述する。『교육과정』とは日本における学習指導要領に相当する公的な文書であり、韓国の学校教育の中で各教科の原点となっているものである。こうして「かしこい生活」の成立理念および、現在のカリキュラムを詳細に読み解いた知見を下に、「かしこい生活」のカリキュラム的特質を明らかにする。

## I. 統合教科の変遷とその歴史的背景

「かしこい生活」は、1980年代の韓国において発表された第四次教育課程で生まれた統合教科の中にある一つの教科である。教科成立後も様々な改正を経て、現在では「探究活動中心の統合教科」として初等学校教育(小学校教育)の中で位置づけられている。本章では、韓国の統合教科およびその中の「かし

こい生活」がどのように生まれ、どのように現在の姿に改正されるに至ったかを社会的な背景や諸理念を交えながら概説することを目的とする。

### 1. 統合教科の誕生と変遷

統合教科が生まれるきっかけとなった第四次教育課程は、『学問原理』に基づくカリキュラムから『人間原理』に依拠したカリキュラムへの転換<sup>1)</sup>に主軸がおかれたものであった。その結果初等学校教育において1・2学年は、子どもの発達を鑑みて諸教科を統合し日常生活に根ざした学びを行うよう舵取りがなされた。当初の統合教科は道徳、国語、社会を統合した「たどしい生活」、算数、自然(理科)を統合した「かしこい生活」、体育、音楽、美術を統合した「たのしい生活」という三種類の教科に集約される形をとった。つまり初等学校1・2学年は三つの生活科のみのカリキュラム構成がなされたのである。その後、第五次教育課程で算数と理科の統合的指導では計算能力が弱くなるという指摘から、算数が分離独立した。<sup>2)</sup>この段階で「かしこい生活」は自然現象を対象とし、それらを探究的に学ぶための教科という性格をもつものとなった。さらに第六次教育課程において理科と社会の統合と位置づけられることで、自然現象および社会現象を対象とし、それらを探究的に学ぶ教科という姿をもつことになる。この段階で教科の統合形態についてはある一定の安定

した形をもち、このまま現在にいたっている。

## 2. 教育改革の過程と内容

以上のように、「かしこい生活」が現在の姿になるにあたっては、韓国の教育課程は幾度かの転換をむかえている。ここで、この韓国の教育課程の変遷がそれぞれのどのような理念に基づきなされていたかを明らかにする。ただし、特に重点的に扱う事項は、軍政解放以後の金泳三大統領(1994～1997)の民主政権以降のものとする。

韓国の教育課程は独立後、韓国政府の教育部が公示する「第〇次教育課程」において規定されてきた。これは、「日本の学習指導要領と同様に、韓国政府の責任のもとで作成・公示されるもの」<sup>2)</sup>である。この教育課程の拘束力は非常に強く、特に「第1次から第5次までの『教育課程』では、初等中等学校が遵守すべき課程」として示されてきた。一方で、民主政権になった第六次教育課程からは、拘束力を弱めており、「教育課程の編成・運営面で地域や学校の『自立性』」<sup>3)</sup>を拡大している。

韓国の教育課程には二度の大きな転換がある。即ち、第三次から第四次にかけての学問中心から人間中心の転換と、第六次から第七次にかけての教授者中心から学習者中心の転換である。これらを統合教科という視点を軸にして見れば、第一の転換である学問中心から人間中心の転換によって教科が誕生し、第二の転換である教授者中心から学習者中心の転換によって、子どもの「活動」が重視される教科へと生まれ変わったと言えよう。では、ここからは以下に第一、第二の転換が起こる際の韓国の時代背景を明記し、さらに第二の転換後どのように教育改革が進行していったのかを辿る。

## 3. 第一および第二の転換

第一の転換が行われる 1980 年代の韓国は高度経済成長の達成と急激な民主化により、

従来の社会的通念が変化した時代であった。高度経済成長によって「社会の各層が自らの利益だけを追求する集団利己主義が広がり、労使関係の葛藤が顕著な社会現象」になると同時に「社会的弱者に対する権利の保障および人権が重要な問題として浮上」することとなった。この問題を解決するための教育改革として「生活の質を向上させる教育、つまり余暇と文化教養的生活を営むための内容が主流」<sup>4)</sup>となるような教育課程の改編を行なったのである。一方で政権運営は未だ軍人出身の反民主的な形態で行われるものであり、国民の民主化を願う声は次第に大きくなっていった。この民主化の政治的萌芽は 1987 年盧泰愚大統領によって発表される「六・二九宣言」をまたねばならなかった。

第二の転換である第七次教育課程は 1990 年代後半に出されたものである。この頃の韓国は「冷戦時代が終焉を迎え、国家間の競争と貿易摩擦が深刻化し、グローバル化（世界化＝Globalization）の流れが拡大」<sup>5)</sup>する中で軍人出身の大統領の時代が終わりを迎え、民主的な選挙による文民政権の樹立が達成された時代であった。政府は米国の朝鮮半島政策が安保重視から経済政策重視へと転換されたことを受け、市場開放、グローバル化などの新自由主義的秩序の構築を急いだ。これは、経済、行政のみにとどまらず教育の分野も含めた様々な部門で行われ、規制緩和の実行や市場原理の導入を行うこととなった。

第七次教育過程は 1995 年、大統領の諮問機関である「教育改革委員会」が、「世界化・情報化時代を主導する新教育体制樹立のための教育改進黨案」（「5・31 教育改進黨案」）を発表することによって口火を切られた。金泳三政権はこの中で従来の教育政策の問題として、「①暗記中心の入試教育、②教育供給者側の認識に基づく画一的教育、③産業かのための量的成長を目標とした教育」<sup>6)</sup>を挙げている。同改進黨案は「これまでの教育改革の基本的な

方向を継承しつつ、グローバリズムや情報化の進展などを視野に入れて策定」されたものであり、「この改革の骨子は金泳三、金大中、盧武鉉大統領と3代にわたって引き継がれていくことになった。」<sup>7)</sup>その内容の中で統合教科について考える上で重要であるだろう項目を以下に箇条書きにして示す。

3. 初等中等学校の自立的運営に寄与する「学校共同体」の構築

4. 人間性及び創造性を育む教育課程

6. 学習者の多様な個性を尊重する初等中等教育運営

まず3の「学校共同体」の構築について述べる。学校共同体の構築は「教育における自治の精神を具体化し、学校の自律性を拡大して教育の効果を最大限に発揮できるよう、教職員・保護者・地域住民が主体的に学校を運営する」<sup>8)</sup>という取り組みである。これは、第七次教育課程において重要視し始める学校の裁量の拡大を意味している。結果的に、統合教科において、学校独自の取り組みを奨励することになった。これは、「教科書中心の画一的な授業が主であった韓国の学校と教師にとって、大きな変化をもたらす指示」<sup>9)</sup>であった。さらにこの学校裁量の時間とは、日本の教育における総合的な学習と近い理念で創設されており、「統合教科→裁量学習」の関係は「生活科→総合的な学習」の関係と類似しているということも注目すべき点である。

次に4と6の内容について述べる。4と6については、まさに第二の転換である教授者中心から学習者中心の転換が色濃く表れている部分である。こうした子どもの人間性や個性を重視する価値観の転換は、統合教科の中においても活かされた。具体的には、統合教科の「性格」の部分にしめされている。抜粋すれば、3. 児童の生活経験を根本にする教育課程である、4. ひとつの主題の下に多様な活動と経験が統合され、弾力的に運営される教育課程である<sup>10)</sup>、という部分である。こ

れは、上述した学校裁量の拡大に加え、子どもの多様な経験や見方を授業に生かすことを企図しているといえる。以上のように、教授者中心から学習者中心の転換をむかえ、統合教科は活動中心の教科へと生まれ変わったのである。

#### 4. 第二の転換以降の教育改革

このような理念で第七次教育課程が成立した翌年の1998年、金大中政権の韓国はアジア金融通貨危機のただ中におかれIMFの援助を要請せざるを得ない状況であった。その中で政権は「経済回復を基調とする競争・成果・効率重視の教育政策の策定」と「韓国を情報化・知識基盤社会へと導き、国際競争力を向上するための教育政策の構想」<sup>11)</sup>を急務とした。金大中は2000年に大統領諮問機関として「人的資源政策委員会」を置き前政権の「教育部」という政府内の部署を「教育人的資源部」と変更するなど人的資源を重要視する政策を行なった。第七次教育課程はこうした政府の舵取りの中で運用されることとなった。

次の教育改革は、2007年「教育革新委員会」が発表した「未来の教育ビジョンと戦略案」が骨子となる。「教育改革委員会」とは盧武鉉大統領が直属の諮問機関として2003年に設置した委員会である。同委員会は『5・31教育改革案』で示された学習者中心の教育改革の路線を維持しながら、少子高齢化社会の到来や社会格差の拡大等、新たな社会問題に対応する教育体制の樹立<sup>12)</sup>を課題としてあげた。「未来の教育ビジョンと戦略案」とは、その結果示された「一世代先を見据えた長期的で総合的な教育改革案」である。同案は4大政策目標と19の課題によって構成されている。<sup>13)</sup>本改革は「規制緩和による地方分権の強化、新自由主義と市場競争主義による教育政策の拡大」という点では従来の教育政策を引き継いでいた。一方で社会的弱者のための

教育福祉の視点を重視したという点で従来の教育課程との差異を見出すことができる。<sup>14)</sup>

この改革における教育課程の具体的な変化として内容領域中心から主題中心教育への変化を上げることができる。特に統合教科はこの影響を大きく反映し、教科の統合であるという性格を取り去り総合的な運営を目指すよう改正が行われた。その結果、「たどしい生活」「かしこい生活」「たのしい生活」のそれぞれに生活中心の大主題が設定され、その下に活動主題が設けられるという教科の構造化が行われた。この活動主題を元に初等学校低学年の学習を総合運営する方針が打ち出されたのである。<sup>15)</sup>

最後に 2009 年改正教育課程について述べる。これは 2012 年施行となる最も新しい教育課程である。2009 年改正教育課程は、李明博大統領のもと再編された教育科学技術部が 2008 年 3 月 20 日大統領に提出した『教育再生、科学技術強国の建設 - 2008 年主要国政課題の計画実行 - 』に端を發し改正されたものである。特に教育再生については、「地方教育自治の拡大や大学入試の自律化、学校教育における規制緩和など（中略）政府権限の縮小と地方あるいは民間の裁量拡大」<sup>16)</sup>を推し進めており、これは李明博の大統領就任の公約である「小さな政府」の実現とも合致した政策である。これによって学校裁量の時間は拡大し、地域性や学校ごとの特性に合わせた教育を行うことが求められることとなった。学校裁量の時間は、特別活動と創意的裁量活動を総合して「創意的体験活動」という形で導入されることになり、これは「学生達の道徳意識の醸成と遵法精神および倫理意識の育成のために教科中心から体験中心に転換」<sup>17)</sup>した教育課程を象徴するものである。

2009 年改正教育課程における統合教科の改訂の内最も大きな変化として、大主題の再編が挙げられる。上述したように、統合教科は「たどしい生活」「かしこい生活」「たの

しい生活」のそれぞれに活動主題を設け、それを中心とした教科構成がなされていたが、本改正で三つの教科の活動主題の統一がなされた。つまり、これまでは三つの生活科でそれぞれ独自に主題設定されていたものが、統合教科として同一の 8 つの主題の下で教科が構成されることとなったのである。その統一された 8 つの主題とは 1 学校と私、2 春、3 家族、4 夏、5 身の回り、6 秋、7 私たちの国、8 冬、である。これは初等学校低学年の生活を中心とした学びを意識した姿勢の表れである。この改正によって、生活科は教科と教科を統合した教科という認識は消え、8 つの主題をそれぞれ違った切り口の活動で追求していく教科であるという認識がされるようになった。すなわち「たどしい生活」は実践中心の教科、「かしこい生活」は探求活動中心の教科、「たのしい生活」は表現活動中心の教科という形で、3 つの違った視点をもって同一の活動主題を追求するという学習へと変化したのである。

## Ⅱ. 「かしこい生活」のカリキュラム分析

かしこい生活はその成立過程ゆえに誤解されがちであるが、社会や科学を教える教科ではない。かしこい生活は、初等学校 1・2 年生の子どもが自身の生活周辺への関心をもち、周辺を探究することで、周辺をよりよく理解することができるよう指導する教科である。つまり、かしこい生活は子どもが日常で出会う周辺の社会および自然現象を対象とし、それらと探究活動を通して向き合う統合教科である。この探究活動によって、彼らが常に見て接する日常周辺を、より繊細に観察し、周辺と自分との関係作りを行うことで、周辺で起こる問題に対して賢く対処できるような資質や能力を育むことができる。

かしこい生活は、日常生活周辺の社会および自然現象から生成する活動主題を中心に教

科内容が構成されている。その活動主題に対して「注視、分類、測定、調査・発表、作成、遊ぶ」の6つの基礎探究活動の視点を与えながら活動を深めていく。かしこい生活の各単元および各時間の学習の究極的な到達点は、『周辺の外国問題解決』である。<sup>18)</sup>

本章は、このかしこい生活のカリキュラム分析を行い、カリキュラム的特質を明らかにすることを目的とする。まず、2009年教育課程の改正について新旧対照表によって例示する。次に活動主題、基礎探究活動の2点を日本の生活科的な視点を踏まえながら詳述することで、かしこい生活の特徴や教科としての体系を明らかにすることを目的とする。

## 1. 2009年改正教育課程における改正の要旨

まず、2009年改正教育課程の改正の要旨について述べる。2009年教育課程において、統合教科の活動主題は八つに分類された。この主題はかしこい生活のみならず、たどしい生活とたのしい生活においても同じ活動主題が適応されている。さらに、第七次改正年教育課程においては1年生と2年生で分けられる学年別活動主題が設定されているのに対し、2009年教育課程では1・2学年を包括的にとらえた学年群教育主題が設定されている。

## 2. 8つの活動主題とその内容から見るかしこい生活の性質

では、以下に2009年教育課程において決められた8つの活動主題について詳述する。<sup>19)</sup>なお以下の記述は「かしこい生活」における主題説明の記述である。ここでは書面都合上、(1)の記述のみにとどめる。

### (1) 学校と私

この主題は児童が学校生活と自身に対して、関心をもってよりよく理解するように助けるためのものである。児童は学校内外の姿と生活、そして自らに対して詳しく調べて探究する。

(カ)学校ナビゲーション-学校の中、外、教室を見回しながら位置、事物、生活の姿などを調べてみる。

(ナ)友人に関心を持つ-友人紹介すること、友人関係図を描くなどの多様な活動をしながらかしこい生活に対して関心をもつ。

(ダ)体を調べる-私たちの体を調べて体の色々な特徴を理解する。

(ラ)私の夢を探してみる-私の才能を調べて私に合う夢を探す。

ここで日本の生活科における9つの内容の中の「(1)学校と生活」に注目しながら、韓国の統合教科の主題について分析する。

まずは(1)の学校と生活である。小学校学習指導要領解説によれば、「(1)学校の施設の様子および先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子やその安全を守っている人々などに関心を持ち、安全な登下校ができるようにする」という内容である。この内容を分割して理解するとすれば、探究的な活動によって学校の施設の様子および先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、表現的な活動である楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、探究活動の結果としての通学路の様子やその安全を守っている人々などに関心をもつという態度が表出し、安全な登下校をするという実践につながると読み取ることができる。日本の生活科ではこの「探究・表現・実践」活動を一つの教科の中で組み合わせながら、それぞれの活動を連続した活動として形成することで、多面的な学びを生み出す。

一方で、韓国のかしこい生活の主題の中にある「学校と私」の内容を見ると「詳しく調べて研究する」という文末からもわかるように探究的な活動のみに焦点を当てて語られている。この点で日本の生活科との差異を見出

すことができる。すなわちかしこい生活は生活科の内容で言えば前半の部分に特化した教科であると言えよう。これはかしこい生活における探究活動の量的な多さという特徴を見出すことにつながる。時間数だけ単純に見てもその多さは際立っている。2009年教育課程におけるかしこい生活の時間数は1・2学年合わせて二年間で192時間である。<sup>20)</sup>一方で日本の生活科は207時間である。ほぼ同じ分だけの授業時数を探究活動のみに特化して指導するという点が韓国のかしこい生活と日本の生活科との大きな、決定的な違いである。しかしながら、自立への基礎を養うという日本の生活科的視点で見れば、探究活動のみで完結する学びは手落ちであるという印象が拭えない。生活科において探究的な活動は自立への基礎を養うための一つの要素であり、それ自体が目標ではないからである。探究的な活動を通して得た気づきを、表現や実践を通してより質の高い気づきへと練り上げていく過程にこそ学びを見出すという考え方から言えば、探究活動のみを追い求めることは方法と目的が逆転しているように見受けられる。

韓国の統合教科はこの批判に対して、かしこい生活という教科で1つの学びが完結したと見るのではなく、統合教科として3教科を相補的に扱いながら学びを生み出すと見るという点でもって解答している。例えば上記で指摘した「学校と私」という内容は、ただしい生活およびたのしい生活では以下のように記述されている。<sup>21)</sup>そこにさきほど挙げたかしこい生活の内容をもう一度入れてみよう。

#### 【ただしい生活】

##### (1)学校と私

この主題は、小学生になって初めて学校で生活し適応するのに必要な、基本生活習慣と基本学習習慣を形成するように助けるためのものである。このために学校で友人らと互いに助け合って生活し勉強するために必要なこ

とを習い、自身と自身の夢を発見して育てる。

(カ)安全に登下校する-交通安全規則を知って安全に登下校する。

(ナ)友人と互いに助け合って勉強する-学校で友人と互いに助けて勉強できる方法を習う。

(ダ)体を大切に扱う-体の大切さを知って元気できれいに維持する。

(ラ)私の夢育て方-自身の夢をかなえるための実践事項を定めて守る。

#### 【かしこい生活】

##### (1)学校と私

この主題は児童が学校生活と自身に対して、関心をもってよりよく理解するように助けるためのものである。児童は学校内外の姿と生活、そして自らに対して詳しく調べて探究する。

(カ)学校ナビゲーション-学校の中、外、教室を見回しながら位置、事物、生活の姿などを調べてみる。

(ナ)友人に関心を持つ-友人紹介すること、友人関係図を描くなどの多様な活動しながら友人に対して関心をもつ。

(ダ)体を調べる-私たちの体を調べて体の色々な特徴を理解する。

(ラ)私の夢を探してみる-私の才能を調べて私に合う夢を探す。

#### 【たのしい生活】

##### (1)学校と私

この主題は学校、教室、友人、自身を素材とし遊んだり表現したりするためのものである。児童は学校、教室、先生、友人、自身をいろいろな方法で表現しながら学校生活を楽しむ。

(カ)学校で遊ぶこと-学校と学校生活を多様な方法で表現して学校遊びをする。

(ナ)友人と遊ぶこと-多様な方法で友人を表現して、友人と共にすることができる遊びをする。

(ダ)体を表現すること-いろいろな方法で体を表現しながら自身の身体を感じる。

(ラ)私の夢を表現すること-いろいろ方法で私の夢を表現する。

以上のように三教科が同じ主題設定を行っており、実践・探究・表現というそれぞれ異なる観点でこの主題を扱っていくというカリキュラムが作られている。かしこい生活として主題を見るのではなく、統合教科として主題を見ることが韓国の統合教科の学びを読み解くという上では重要なことである。日本においても、生活科と他教科との関連は重視されており、生活科の実践では他教科と関連した研究が多く見られる。韓国の統合教科はその理念をカリキュラムとして表したものであり、それは日本の問題意識と近いものを共有しているということであるため、その表出の一例としては重要な示唆に富むものである。事実、2009年に教育課程が改正される前までは統合教科3教科の主題はバラバラに設定されており、それぞれ実践活動・探究活動・表現活動の追究は一教科の中だけで完結するようなカリキュラム編成がなされていた。その問題点を解消するための改正が本改正であり、主題の統一だったのである。

しかしながら、現状この理念が韓国の教育現場に根付くかどうかという点には疑問がある。なぜなら、先に述べた統合教科の成立課程にも原因のあるものであるが、2007年教育課程においては三教科がそれぞれ独立した形の主題構成で授業が行われていたため、三教科間の溝は深いからである。カリキュラム上は主題が統一されて、三教科の関連を重視した形になっていても、それが現場にしっかりと根付いていなければ「今はたのしい生活の時間ですよ。それは、かしこい生活でやりましょう。」といったような声が蔓延することにつながる。それはまさに形骸化した主題統一であり、改正の理念は生きない。子どもの学びを多面的に作り出せるかというのは三教科をいかに弾力的に運営できるかという点にか

かっている。

### 3. 基礎探究活動とその運用

ここからは「かしこい生活」の基礎探究活動について述べる。基礎探究活動とは、かしこい生活において規定されている探究方法の総称である。基礎探究活動は「注視」、「分類」、「測定」、「調査・発表」、「作成」、「遊ぶ」の六つから構成されている。それぞれの内容は以下の通りである。<sup>22)</sup>

#### 「注視」

- ・『注視』とは全体的に見てみる、見物する、観察する活動である。
- ・五感を使って事物や現象に対し、子どもの既存の知識を越えることができるように助ける。
- ・注視する活動の後、分類、測定、調査・発表、作成、遊ぶ、と連係することができる。
- ・事例：学校周辺で春の様子を注視する

#### 「分類」

- ・分類することを通して、対象の特徴を探することができるように助ける活動である。
- ・分類活動の一種で分類基準基準を一つに制限する。
- ・標準化して道具や単位を基準にするよりは、日常的な基準を使用するようにする。
- ・事例：紅葉した葉を色別に分けてみる

#### 「測定」

- ・事物の属性を理解する方法で、時間、距離、大きさ、長さ、重さ等の見当をつける活動である。
- ・測定活動の一種で、標準単位よりは見当で、あるいは目分量で生活単位を使用して測るようにする。
- ・事例：背と体重を測ってみる

#### 「調査・発表」

- ・調査の主題を選び、具体的に調査した後、調査結果を発表する活動である。
- ・問題解決力を育てるための活動である。
- ・調査活動自体、つまり調査対象、手続き、方法等を指導する。
- ・事例：私たちの町のために尽くしてくださっている方々を調査して発表しましょう

#### 「作成」

- ・考えた事を具体物で作ったり、模様で製作したりする活動である。
- ・作る事を通して、学習したり、学習結果を作って提示したりする。
- ・事例：経験カードを作る

#### 「遊ぶ」

- ・事物を具体的に扱う活動である。
- ・遊びを通して、1学年の学生たちは、多少困難な初歩的な『実験』『経験』『社会探究』経験を提供する。
- ・遊び活動を通して、互いに協同、開放、参加態度共に学習する。
- ・事例：お店遊び、病院遊び

なお、この基礎探究活動はただしい生活やたのしい生活では別の項目が設定されている。それゆえに、この基礎探究活動こそかしこい生活のカリキュラム上の特徴を表すものとも言える。この基礎探究活動は上述した活動主題と非常に密接な関係をもっている。

下図は 2007 年教育課程における教科書の一部である。このように各主題に対して各基礎探究活動がしっかりと固定化されて割り振られているというのは、日本の生活科にはない特徴である。生活科では学習指導要領解説において、内容の詳述や学習の例示は行われるものの、それを踏まえて目の前の子どもという個別具体的な諸要素に合わせて独自に運用する姿勢が求められている。それゆえにかし

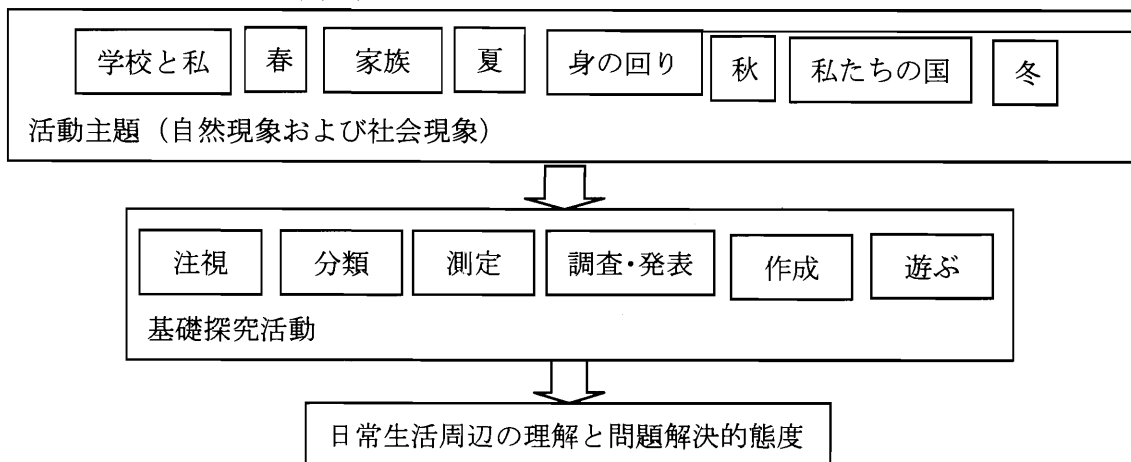
こい生活にあるような、固定化した活動内容を定める事に対しては否定的である。もちろん活動の固定化には良い点と悪い点がある。良い点としては、教師全員がその主題に対して同じように取り組むため不安や迷いなく取り組むことができ、周囲の教師からの助言も受けやすいという点である。一方でそれは目の前の具体的な子どもの姿とはかけはなれてしまう可能性を内包し、教師の個性や創造性を発揮できなくなることにもつながることである。この価値観は韓国教育全体を包んでいる価値観である。主題設定の改正を見ると、2009 年の改正で多少固定化から離れたように見受けられるが、基礎探究活動においてはまだその価値観は根強く残っている。これは、今後韓国教育全体でどのような舵取りがなされるかという点で注目すべき視点の一つであろう。

#### 4. 活動の構造化と固定化

基礎探究活動の固定化はカリキュラムの構造化を助けるという機能もある。上述したような性質の六つの基礎探究活動の視点によって、活動主題を探究するという点で構造的に理解しやすい形になるのである。かしこい生活における学習は下図のような構造で行われていると図示できる。<sup>23)</sup> 活動の固定化については先にも述べた。こうした構造化がなされることで、現場はその活動がどのような意味をもつかということがよりわかりやすく、かつどのような活動が適しているかということも理解しやすい。ただしい生活やたのしい生活にはこの基礎探究活動が設定されておらず、こうした内容と活動の構造的結びつきはされていない。<sup>24)</sup>したがって、このようにどのような主題で、かつそれをどのような基礎探究活動で探究するかということが構造的に説明されているという点がかしこい生活のカリキュラム特質であるといえよう。



(図 2) : かしこい生活の学習体



### おわりに

本研究では、第一章で韓国の初等統合教科の成立過程について、その背景の社会状況も踏まえながら改訂の要旨を概説し、そこに含まれる理念を明確にした。こうした改訂の過程を追いつつ現在の 2009 年改正教育過程について考察する素地を得た。第二章ではその喫緊の改訂の新旧対照を行い、改訂の要旨をまとめた。さらに改訂された 8 つの活動主題と基礎探究活動について日本の生活科的な視点を混じえながら詳細に論じた。これらを下に、探究活動中心である「かしこい生活」は活動の構造化と固定化という特質を見出すことができた。さらに、「かしこい生活」だけではなく、「ただし生活」「たのしい生活」を含めた、初等統合教科全体でカリキュラムを捉えるという視点によって、日本の生活科との類似点を上げることもできた。

今後これらのカリキュラム的な特質が実践の場ではどのように結実しているのかについて追究する必要がある。本研究で明らかにした特質を踏まえて授業実践を分析的に論ずることが次の課題である。

- 1) 二宮皓編『世界の学校 教育制度から日常の学校風景まで』、学事出版、2006 年、128 頁。
- 2) 馬居政幸・夫伯『韓国の統合教科「賢い生活」の特徴—日韓社会科教育比較考（4）

—』、静岡大学教育学部研究報告、教科教育学篇、2004\_3、39 頁。

- 3) 文部科学省生涯学習政策局調査企画課『諸外国の教育改革の動向 6 各国における 21 世紀の新たな潮流を読む』、ぎょうせい、平成 22 年、294 頁
- 4) 尹敬勲(ユン ギョンフン)『韓国の教育格差と教育政策 - 韓国の社会教育・生涯教育政策の歴史的展開と構造的特質 - 』、大学教育出版、2010 年、143・144 頁。
- 5) 尹敬勲(ユン ギョンフン)、同書、164 頁。
- 6) 尹敬勲(ユン ギョンフン)、同書、165 頁。
- 7) 文部科学省生涯学習政策局調査企画課、前掲書 4)、286 頁。
- 8) 文部科学省生涯学習政策局調査企画課、前掲書 4)、291 頁。
- 9) 馬居政幸・夫伯、前掲論文 3)、42 頁。
- 10) 馬居政幸・夫伯、前掲論文 3)、41 頁。
- 11) 尹敬勲(ユン ギョンフン)、前掲書 6)、167 頁。
- 12) 文部科学省生涯学習政策局調査企画課、前掲書 4)、287 頁。
- 13) 4 大政策目標とは以下の通りである。1 多様なニーズを満たす修学前教育及び初等中等教育の実現、2 世界水準の高等教育の育成、3 生涯教育の習慣化と人的資源の活用の向上、4 教育を通じた社会格差の是正
- 14) 尹敬勲(ユン ギョンフン)、前掲書 6)、168 頁。
- 15) 강충열・홍영기・정광순『초등통합교과교육』、학지사、2011 年、112~121 페이지。  
『初等統合教科教育』、
- 16) 文部科学省『諸外国の教育動向 2008 年度

---

版』、明石書店、2009年、248頁。

17) 2009 ……

<http://blog.naver.com/moumou100k?Reirect=Log&logNo=150079526255>

18) 강충열・홍영기・

정광순 『초등통합교과교육』、학지사、2011년、315-317 페이지。

『初等統合教科教育』

19) 교육과학기술부、『초등학교

교육과정』、2009년、43-47 페이지。

教育科学技術部『初等学校教育課程』、43-47頁を翻訳。

20) 韓国の小学校授業時間は1時限あたり40分である。ただし生活は128時間、たのしい生活は384時間、それぞれ1・2学年の2年間で割り振られている。一方日本の道徳の時間は69時間、音楽・図工・体育を合わせた時間は483時間である。

21) 교육과학기술부、『초등학교 교육과정』

教育科学技術部、『初等学校教育課程』、30頁および57頁。

22) 前掲書1)、317頁。

23) 前掲書1)、316頁の図を基に一部修正した。

24) 前掲書1)、298頁および334頁によれば、たのしい生活については「実践活動」たのしい生活には「歌・遊び」が活動内容として挙げられている。これはそれぞれの教科の主題において全ての内容を貫く要素であり、かしこい生活のようにある主題にはこの基礎探究活動という構造化はなされていない。よってこれがかしこい生活の特質とすることができるのである。